
BRackHeart

芽実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B R a c k H e a r t

【Nコード】

N 2 6 4 1 Y

【作者名】

芽実

【あらすじ】

以前魔法のiらんど様で連載しておりました。現在は再連載を検討中です。

兄と妹。会えなくても……幸せならいい、そう思っていた。四年の時を経て再び二人の時は動き出した。
犯罪者の兄とその兄に恋する妹の物語。

犯罪行為、禁断愛を助長、推進するものではありません。

1（前書き）

小説家になろう！様での初めての連載作品になります。よろしくお
願いします。

朝、カレンダーに目を向けて、そうか、と溜息をついた。

寝ぼけていたであろう頭はさえわたった。

今日はお墓参りに行かなくちゃ……。

あとはケーキを買って、お祝いしよう。誕生日だねって。

今日の行動計画を軽く頭の中で考えながら鍋に水を入れてコンロに火をかけた。

マグカップに飲みなれたインスタントをスプーンで適量いれる。いつもなら自分の好みの濃さにするけれど今日は少し多めに入れた。自分の好みにする気分じゃない……。

少し強めのコーヒーの香りが私の周りを漂った。

鍋の中の水が沸騰した音が聞こえて、マグカップを持ったままコンロに近寄る。

ついでにトースターにパンを入れて、今日の朝食はこんなもんでしよう、とひとりうなずいてみた。

静かな室内でパンを食べ終わるとなんとなくむなしくなり、沈んだ気持ちになった。

何気なくテレビをつけてカチャカチャとチャンネルをまわす。コーヒーを片手にリモコンを握った。

——何か面白いもの、ないかな。あたしがテレビをつけたのはそんな軽い気持ちだけだった。

「四年前……」

「今日の天気は……」

「父親……」

「続いての……」

「さが……」

え……。そんなまさか……。

思いあたりのあるワードが並び、血の毛が引いていく。苦いはずのコーヒーの味もよくわからなくなった。

こんなこと思っちゃいけないのだけでも……自分の予想が当たっていませんように、と強く願いながら目を強く一度ギュッとつむった。

そしてビクビクしながら震える指先でひとつの局にあわせた。

「速報」と書かれた赤のプレートに目が行く。アナウンサーの無機質な声が耳に響いた。

「繰り返します。只今はいりましたニュースです。四年前、父親を殺害して指名手配されていた容疑者、相良恭一《さがらき けいいち》氏が自首してきました」

一瞬、画面の向こうのその人の意志の強い目が映った。

ガシャン……。

持っていたお気に入りのコップが落ちて音をたてて割れた。

四年前に、初めて買ったコップだ。半分ほどのこっていたコーヒーがこぼれて床にひろがった。

嘘……。パシャパシャとフラッシュをたかれながら写真を撮られて顔を俯かせているその人の映る画面に夢を見ているような感覚で近寄った。

スリッパの上からコップの破片を踏んで更に割れる音がした。

「お兄ちゃん……」

画面に触れてつぶやいた。紛れもない、お兄ちゃんだった。どんなにかわっても、あたしがお兄ちゃんを見違えるはずが、ない。

「この事件はどういった事件だったのでしょうか？」
「この事件はですねえ……」

スタジオにいるであろう人たちの会話が、無情に響く。
その言葉が、あたしをひどくイライラさせた。

何も……。そう、何も、知らないくせに……。
奥歯をギリギリと噛んだ。

相変わらず、そこにお兄ちゃんは映っている。たとえば、犯罪者と呼ばれるようなレッテルを張られていたとしても。
私にとって、お兄ちゃんはお兄ちゃんだ。

なんの変りもなかった。

そこから視線をそらすことはなく、ひたすらにお兄ちゃんを画面越しに指で触れた。

膝立ちになり、夢中でお兄ちゃんに触れた。
膝と割れたコップの破片が接触し、痛い、と感ずることすらもったいなく思えた。

今は、そんな些細なことなんかどうでもよかった。
今は、お兄ちゃんのことだけを、考えていたかった。

「四年前、相良恭一氏は父親を殺して逃亡したと思われた事件ですね。妹さんが目撃しているか、と疑われたそうなんですが、当時の妹さんは震えた体で知らないと答えるだけだった、と」

「それがいきなりの自首ですか。犯罪心理に詳しい瀬川さんにお話をうかがいたいと思います。瀬川さん」

「はい。今回の事件では……」

画面がスタジオに戻ってもあたしはお兄ちゃんの影をひたすらに探した……。お兄ちゃん……。

好き勝手に言っているニュースを見ながら呆然とするしかないあたしのもとに手紙が届いた。

差し出し日も切手もない。差し出し人もわからない。どこにでもあのような見慣れたシンプルな茶色の封筒には何も書かれていなかった。

仮にポストに入ってもあの状態のあたしが手紙に気付くはずがない。

その手紙があたしの手元に届いたのは隣の部屋の仲よくさせてもらっている若い夫婦が届けてくれたからだ。

一度は呼び鈴を無視したものの、何度も鳴る呼び鈴に私はやっと動いた。

その際に、膝の痛みをはっきりと自覚した。
ハーフパンツなんて、穿くんじゃなかった、と今更な後悔が押し寄せた。

その傷に気づかれないようにハーフパンツを腰ではくと玄関を開けた。

昨日の夜になるのだろうか。

夕方に近い時間帯にマンションの近くをウロウロしていた男がいた、らしい。薄暗くて顔は見えなかった、と言っていた。

その男が私に手紙を渡して欲しい、と頼んだそうだ。

最初は怪しいから断っていた。最近は物騒だし、もしかしたらストーカーじゃないかって……。

なのになんでここにあるんだろう、と首をかしげる。この話にはまだ続きがあるようで、私は黙って聞いていた。今は、一人であるのがなんとなくこわかったからだ。

「渡せないな」

「お願いします」

その繰り返しだったらしい。でも。

「四年前から1人にしてしまった……。会いたいけど、会うわけにはいかない……」

そう言って頭を地面に着くんじゃないかってくらいに下げたらしく、さすがにとまどったらしい。
しまいには土下座をしようとしたらしく、やめてくれ！　といってそれを阻止したようだ。

彼はあまりに必死に頼むから断れなかった、と語った。

それに、あたしが1人なのを知っていたから、と言った。あたしは1人だと思われないように男物の服を洗濯して干したりするから、ストーリーじゃないと思ったらしい。

「ごめんな、もしあれだ、気持ち悪かったら捨ててもいいと思うけど……」

眉を下げて笑うその人にあたしは意気消沈したままうつすらと笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「元氣、ないけど、どうした？」

お兄ちゃんのことなんて、言えるわけがなかった。だから、あたしは首を左右に振った。
なんでもないです、と口にしながら。

「ちょっと疲れているだけです。心配かけてすみません。ありがとうございます」

「なら、いいんだ」

4（前書き）

物語が動く……予定です。

そう言つて去る背中に私は一礼してその手紙を見た。

いったい誰から、だろうか。

四年も前のことを知っているのは、事実を知っているのはたった一人だけ。

でも、その人は……。

私がここにいることを知らない。

普段なら捨てるかもしれない。

でも、ありえないことがおきるかもしれないと少し期待していた。

それは、どうしてだろうか。なんで柄にもなく期待なんてしているのだろうか。

そんなの、わからなかった。

ただ、何となくハサミを出して上をチヨキチヨキと切った。
そして中から紙を出した。

思わず目を見開いた。間違えのはずはない……。この字は……。
取り出した白い紙には、忘れるわけのない懐かしい字が踊っていた……。

私は一度手紙を抱きしめるとその文面に目を落とした。未だに付けっぱなしのニュースや、なっている携帯を無視した。というよりも、気にするだけの心の余裕が私にはなかったのだ。

「ひかりへ」

その文字から柔らかい声まで聞こえてきそうだった。
その声が聞こえてくるんじゃないか、とあたりを見渡した。
聞こえるわけではないのに。それをわかっているのに。もう、四年前から聞いていない声……。

どうか、私のそばにいてください……。何も望まないから、そばに……。それは何度願っても、叶わない……。私は再び手紙に目を落とした。

「ひかりと兄弟になってから6年が過ぎた。僕はー……」

僕はひかりのいい兄だったろうか。正直あまり自信はない。

あの日、ひなたさんとひかりが家族になった日。ひかりは覚えているだろうか。

僕は覚えている。今まで、ずっと、あの日からのひかりとの思い出だけが僕の力だった。多分、これからも……。きっとそれは変わることもなくて、一生、僕の力になる。

初めてひかりが僕に笑いかけてくれた時に正直に話すと僕はひかりに見惚れたんだ。

ひなたさんはいいお母さんだったし、ひかりはいい妹だった。

もし、ひなたさんの事がなかったら……。そんなこと今更なのはなに、僕はどうしても考えてしまうんだ。もし、ひなたさんが生きていたら、親父はあんならなかったのかも知れない。

そうだったら僕たちはまだ笑っていたのかも知れない。

まだ一緒にいられたのかもしれない。

一緒に年を重ねて一緒に思い出作って。

いっぱい喧嘩や仲直りして、もっと同じときを重ねられたのかもしれない。

それだけが悔しい。

どうして、と今も思う。

でも、これだけは言える。僕はひかりやひなたさんに会わなければ良かったとは思わない。思ったことは一度もない。

思い出すと、ひかりと会ってから僕の世界は変わったんだ……。

ひかり、ありがとう。

4（後書き）

誤字、脱字などありましたらご報告お願いします。

私はそこまで読むと目を閉じたー……。

あの日ー……。

今でも昨日のことのように思い出せる。

「はじめまして、ひかりですー!」

「こんにちは、ひかりちゃん。僕は“きょーいち”です。これからよろしくね」

柔らかに笑うその人こそがお兄ちゃんだった。

「彼は恭一くんよ? ひかりのお兄ちゃんになるの」

お母さんが紹介したのはまだ16歳のお兄ちゃん。

私はまだ12歳だった。

私は昔、そう、お兄ちゃんと出会っ前まで「会沢《あいざわ》ひかり」だった。

血のつながりのあるお父さんの顔はぼんやりとしか覚えてない。…
…ひどい、娘だろうか。

物心ついたころにはすでにいなくて、遠くにいるのって聞かされていた。それに、私にはお母さんがいて、あのころの私は、お母さんさえいればあとはなんだっていい。そんな風に思っていた。

だから、別に、新しいお義父さんやお兄ちゃんに興味はなかった。

12歳の時、私は「相良《さがら》ひかり」になった。

お兄ちゃんの妹になった。血のつながりはなかったけど、お兄ちゃんの妹になった。

最初のうちはお兄ちゃんなんて、関係ないって思っていた。お母さんがいればいいって。

でも、お母さんは“みんなの”お母さんだった。そしてお義父さんの“奥さん”だった。

今までみたいに“私だけの”お母さんじゃなくなった。

さみしかった。なんだか、世界に一人になったような気分だった。

私にはお母さんしかいないって思っていたからかもしれない。

そんな時にそばにいてくれたのがお兄ちゃんだったんだ。

お兄ちゃんは優しくかった。すごく優しくかった。

私を一番にわかってくれていた。いつも助けてくれた。いつも支えてくれた。

何があっても私を見捨てないでくれた。

私は……。お兄ちゃんが居なければきっと生きることを諦めていた。

お兄ちゃんが居たから……。今の私がいる。でも、私はお兄ちゃんのいい妹じゃなかったよ。

私はお兄ちゃんに「十字架」を背負わせてしまった……。私のせいで……。お兄ちゃんは犯罪者になった。

13歳の時、お母さんがこの世界のどこからもいなくなった。そう、死んだのだ……。事故だった。暴走した飲酒運転の車に巻き込まれた。

あの日はお兄ちゃんの誕生日だった。

お母さんは誕生日のケーキを持っていた。たぶん、予約していたケーキを取りに行ったんだと思う。

だって家族になってから初めてのお兄ちゃんの誕生日だったんだもん。

お母さんがいなくなった、その時からお義父さんは変わった。

私は首を振ってそのことを思い出すのを止めた。そして一枚目を他の手紙の下にして二枚目に目を向けた。

わずかに4年嗅いでいなかったとお兄ちゃんの香りがした気がした。

五年前、親父の暴力にすぐに気付かなくてごめん。四年間、独りにしてごめん。

怪我は残ってないか？ もう、いたくないか？ ひとりで泣いてないか？

そばにいてやらなくて、ごめんな……。

僕は「気付かなかった」って言い訳にしてひかりをひとりにした。痛い思いもしただろう？ つらかっただろう？

親父に立ち向かえるのは僕しかいなかったのに、逃げてしまっごめん。

逃げてしまっで、親父にも向き合わなくて、ひかりを傷付けて本当に、ごめんな。

もう、ひかりは痛い思いはしなくていい。しなくていいんだ……。ひかりが自分を苦しめる理由も、ひかりが苦しむ理由もこの世界のどこにもないんだから……。

お母さんがいなくなっしてからお義父さんは変わった。

お酒をいつでも飲んで、いつも私を殴った。蹴った。すごく痛かった。すごく、悲しかった。泣いても叫んでもお義父さんは毎日毎日それ続けた。

そしていつもすごく辛そうに言った。苦しそうにそれを吐き出した。

「どうしてひなたが死んだんだ!? どうしてひなたなんだ!? どうしてー……?」

毎日毎日、私は殴られた。私は毎日怪我が増えた。

でも、お義父さんは苦手だったけど嫌いになれなかった。

お母さんへの言葉やお母さんへの愛は偽りなかったから。

私の大好きなお母さんの愛した人だったから。

その涙や悲痛な叫びに嘘はないと信じたかったから。

そんな毎日での支えは紛れもなくお兄ちゃんだった。お兄ちゃんが居たから私は我慢出来た。お兄ちゃんが居たから私は頑張ろうと思えた。お兄ちゃんが居たから……。

でも、お兄ちゃんは……。私が14歳の時……。お兄ちゃんの18歳の誕生日に……。

「な、な、何してるの?」

「ひかり……」

血の赤に染まった手。滴り落ちる血。床は目をそらしたくなるほどの赤で、その中でお兄ちゃんは……。

「何、したの？」

倒れている、お義父さん。溜まっていく血だまり。震える体はどうしようもなかった。

「ひかり……」

大好きなお兄ちゃんなのに……。お兄ちゃんが近付くたびに私の震えは大きくなった。

「悪い、な。怖がらせて。ごめんな？ ひかり」

いつもと何も変わらない、私の大好きな優しい、優しい声だったのに……。

「僕は行くから……。ひかりはもう泣かないで？」

最後まで心配していたのは私のことだったのに……。私はお兄ちゃんを引き止めることも、お兄ちゃんについていくことも出来なかった。いや、しなかった。あのときの私は、ただ、現実を受け入れられなくて必死だった。

「おめでとつ」

そう言って、笑うはずだったのに……。

思い出して1つ深いため息をついた。

皮肉なことに、と私はカレンダーをみた。

今日はお母さんの命日で、お義父さんの命日であった。そして、お兄ちゃんの誕生日でもあった。

私は再び手紙に目を落とした。2枚目は読み終わったみたいだ。私は恐る恐る三枚目を一番上にした。

7 (前書き)

最終話です。以外に早かった

ひかりは優しいから。

ひかりは暖かいから。

僕のことを誰にも言わなかったんだね。僕はひかりに罪を与えてしまったね。

ごめん、ひかり。ごめん……。

許して欲しいなんて思っていない。むしろ、許さないでほしい。

親父を殺した僕を恨んでほしい。家族を壊した僕を憎んでほしい。どうか、僕を一生許さないでほしい。

ひかりももう……18歳。あの日の僕と同じ年齢だ。

ひかりにはひかりって名前の通り、ひかり輝く未来がある。

ひかりのこの先は僕とは違う。違うから、どうか笑ってほしい。幸せになってほしい。

誰よりも、誰よりも幸せになってほしい。

きっと、僕とひかりのこの先は交わることがないと思う。交わらないほうがいいと思う。

だから、いつてはなんだけどひかりの一生分には少し少ないだろうがお金を振り込ませてもらった。その額のお金は、普通四年では準備出来ないと思う。

僕はあれからいろいろ汚いことに手を染めた。でも、そんなお金でも使ってほしい。

汚いお金だけど、今の僕がひかりの為に出来る唯一のことだから。これからのひかりのために、できる最後のことから。

僕はこれから警察に行こうと思う。もしかしたらまたひかりのところに警察がくるかもしれない。

そのときは「知らない」と言ってほしい。ひかりに迷惑はかけたく

ないんだ。僕は本当にひかりを――……。

涙がこぼれた。私なんかの為にどれだけお兄ちゃんは自分を犠牲にしたのだろうか。

「お兄ちゃ……」

どれだけ、闇に染まったんだろうか……。それを考えると胸が苦しくなった。

私はけして、いい妹なんかじゃなかったのに……。

お兄ちゃんに甘えてばかりだったのに。

お兄ちゃんの苦しみもわからないで……。その苦しみを理解しようとしなかったのに……。

警察に、行こう。

私は涙をこぼしながらそう決めた。4年も前のことを言っても、今更なことかもしれない。

あの日のことを話しても信じてもらえないかもしれない。

それでも……。お兄ちゃんだけに罪を背負わせたくはない。

私にも半分、罪を背負わせてください……。

私はお兄ちゃんと一緒にいたいから。私ね、相手がお兄ちゃんでも、犯罪者でも、やっぱりお兄ちゃんに恋したんだよ。

やっぱり、お兄ちゃんに恋してるんだよ。

私の幸せはお兄ちゃんがいらないとはじまらないの。

お兄ちゃんのいない世界に意味を感じない。お兄ちゃんのいない世界は、もう、嫌なんだよ。だから……。

ボタンとしまった部屋の中。

無残に割れたコップも、床に広がるこぼれたコーヒーも、テレビもそのままです。

たった一人の住人はいなくなった。テレビから聞こえてくる音。再び、四年前の事件を報道している。もう鳴り響く携帯をとる人もいない。そんな中で開かれた手紙の一枚がひらひらと床に落ちた。その手紙には涙で滲んだ文字があった。

僕は本当にひかりを大切に思っている。ひかりは妹だけど愛しかった。今も、愛おしい。愛しているなんて言葉いえる立場じゃないから。ただ、お願いします。どうか僕を忘れて幸せになってください。

End
相良恭一

7（後書き）

最終話でした。

読んでくださってありがとうございました！

さてさて、この物語の題名「B R a c k H e a r t」ですが、綴り間違ってるよ！ っと思った方！ わざとです。実は意味がありません。

B ↓ ブラザーの略、兄

R a c k ↓ 破壊

H e a r t ↓ 心、気持ち

これを合わせたものだったんです。

ここまで読んでくださって本当にありがとうございました！

芽実

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2641y/>

BRackHeart

2011年11月12日17時39分発行